

蟻の王

中条 卓

世界の没落とはおよそ縁のなさそうな平凡な午後、あなたの妻があなた宛の手紙をポストに見出す。ありふれた白い封筒にやや見慣れないフォントで印刷された宛名。差出人の名前はない。あなたも妻もはじめはそれが週に何通となく届くダイレクトメールのひとつだろうと考える。

「でも」と妻が首をかしげる。差出人が書いてないのは変よねえ、これじゃクズ籠に放り込んでくださいって書いてあるようなものだわ。

「かえってそこが狙いなのかも知れないよ」

「なんだか気味が悪いわ」

「爆弾でも入っている?」

「タンソキンとか」

あるいはその両方の性質を備えた何か……例えば爆発的に増殖するウイルスが仕込まれているのかも知れないよ、と言おうとして、あなたはウイルスの増殖には生きた細胞が必要なことを思い出す。あなたも妻も医師の資格を持っているのでふたりの間では医学的な冗談が交わされる機会が多いのだが、あなた自身は実際の診療を離

れて久しく、自分の医学知識が日に日にぼやけていくことを自覚している。

手紙はそのまま食卓の隅に放置され、電話代の請求書や同窓会の案内といった雑多な郵便物とともに次の休日の午後まで開封されない。休日の日課になっている郵便物整理を始めたあなたは何気なくその封筒に手を伸ばす。軽く振ると中身が封筒の端まで移動するのがわかる。ダイレクトメールではなさそうだ。ハサミで端を切り、おそるおそる上から覗き込んだあなたはいくぶん安堵したように声を出す。

「なんだ、写真だよ」

すべり出る数葉の写真。キッチンからコーヒーを運んで来た妻が拾い上げ点検する。「何これ？ 宴会の余興かなにか？」

一枚目の写真には目隠しをしてアップライトピアノに向かうあなたが写っている。絞首刑にでも使いそうな黒い目隠し。

「ええ？ 全然覚えがないよ。だいいちおれが目隠ししてピアノなんか弾けるわけがないじゃないか、ギターな

らともかく」

妻から手渡された写真を点検したあなたは右下隅に記された日付に気づく。

「なんだこれ、今年の十二月二十八日の日付になつてるぜ。三ヶ月も先じゃないか」

なにかの冗談かなあと言いかけたあなたの目の前に妻が二枚目の写真を突き出す。

「誰、これ？ずいぶん親しそうじゃない」

妻の言葉はわずかに険を含んでおり、脱色された柔らかな髪の毛が電気を帯びているかのようだ。妻が差し出した二枚目の写真には革張りのソファに深く腰掛けてくつろぐあなたが写っている。酒が入っているのだろう、あなたの顔は赤らみ、禿げ上がった額がてらてらとフラッシュを反射している。あなたの隣にはチュニツクとでも呼ぶのだろうか、ゆったりとした古代風のドレスに身を包んだ若い女性が座り、熱心にああなたの言葉に耳を傾けている様子だ。彼女の両手は何かを捧げ持つようにあるいはあなたから何かを受け取ろうとしているかのようにああなたに向かって差し出されている。

「いやこんな女性は……」

知らないと言おうとしてあなたはしばし口ごもる。そ

の顔には確かに見覚えがあるのだが、一方で実際にこんな場面に出くわすような機会が自分にあるうとはとても思えない。「見たことも会ったこともないよ」

「じゃあこの写真は何なのよ」

「わからん。でもこの写真も未来の日付だぜ」

三枚目の写真はあなたの顔の一部を大写しにしたものだった。何かに見入るように大きく開かれた両目が画面を占めていて、特徴のある目じりのほくろがなかったら誰の顔かわからなかったかも知れない。

「あなたの顔ね。なんだってこんなにクローズアップしたのかしら。悪趣味ね」

「おれが撮ったわけじゃない」

「ねえ、目の中に何か写ってるんじゃない?」

言われてみればなるほど、写真の中のあなたの瞳にはあなた自身の顔が写っているのだった。角膜の表面で歪曲されたその姿はどこか滑稽でさびしげだ。

「こりゃあやっぱり合成写真だよ」

あなたは断定する。普通のカメラではこんな写真は絶

対に撮れない。マジックミラーを使えば、あるいは撮れるのかも知れないが、またしてもそんな状況は身におぼえがなかった。あなたは写真を裏返す、とそこには封筒の宛名と同じフォントでたった四文字、「FYEEO」と記されているばかり。

「ねえやつぱり薄気味わるいわ、そんな写真捨てちゃいなさいよ」

ねえほんとおぼえないのあなた私に隠れて何か悪いことしてるんじゃないのねえこれって何かの脅迫なんじゃないのかしら……次第に妄想じみてくる妻の連想を断ち切り（彼女の専門は精神科なのだから、差出人の心理を推測することなんかお手のものだろう？）、あなたはこれら三枚の写真をまた元の封筒にしまう。

「もう少し調べてみるよ、合成写真だとしたらその証拠が見つかるかも知れないし」

あなたたちは沈黙し、コーヒーがすっかり冷めてしまったことに気づく。

気がかりな夢から覚めて眠れなくなったあなたは寢床を抜け出してキッチンに向かい、汲み置き型の浄水器からコップに水を注ぐと自分の仕事場の扉を開ける。そこではまるで部屋自体がスクリーンセイバーの画面でもあ

るかのように、数台のパソコンと同数のモニター、電話機あるいは外付けディスクドライブといった周辺機器の色とりどりの発光ダイオードがそれぞれ固有のリズムで点滅している。マウスを二、三回素早く動かすとプレイベートな用途に使っているマッキントッシュが眠りから覚め、スクリーンが明るくなる。緑がかった画面の色合いが元に戻るまで数秒待ったあと、あなたは画像解析用のソフトを立ち上げ、フラットベッドスキャナの最高解像度で三枚の写真をパソコンに読み込む。一ギガバイトという、一般人が使うには不釣り合いな大容量のメモリを搭載したマシンでもこれだけ巨大な画像を扱うにはいささか時間がかかる。あなたはコップの水を半分ほど一気に飲み干す。

古典的な、あるいはアナログな手段によって合成された写真であれば合成の証拠をあばくのはかえって難しいかも知れない。しかしあなたはこれらの画像がデジタル画像であることをほぼ確信している。

画像を合成した証拠はわりと簡単に見つかる。一枚目の写真のあなたの顔とピアノを弾く男の手とは肌の色合いが違っているし、男の手はあなたよりもずっと毛深い。さらに決定的な証拠は画像を拡大していくにつれて明らかになる。すべてのデジタル画像はピクセルと呼ばれる

単位から成り立っていて、どんなデジタル画像でも拡大を繰り返せばひとつひとつのピクセルが見えるようになり、やがては全画面がたったひとつの色に占められてしまふのだが、一枚目の写真のあなたの顔とそれ以外の部分とではこのピクセルの大きさが、言い換えれば画像の解像度が少し違っているのだ。顔の部分はもっと大きな画像から切り取り、縮小してから写真の他の部分に貼り付けられたものらしい。

さてと、二枚目の写真に写る若い女性の姿にあなたは見入る。表情もしぐさも自然で、コラーージュによるものとは思えない。決して美人とは言えないがどこか惹きつけられる。肌はむしろ浅黒い方だろう。長いまつげに飾られた奥二重の大きな目はなかなか魅力的だが少し離れすぎてている。唇は薄く、口は大きい。鼻は高いが裾野もまた広くてやや日本人離れしている。どこかで確かに見たことのある顔なのだが、それと同時にどこにも存在しない顔だという奇妙な確信がある。そんなことつてあり得るだろうか……細い首筋、華奢な肩と不釣り合いに大きな乳房……首から下は若いころの妻に似ているといえなくもない。

そして三枚目。これは確かに最近撮影されたものだ。

証拠はこれ、眉に混じった長くて太い数本の毛だ。ほんの数ヶ月前に気づいていささかショックを受けたもの。年を取るとそんな眉毛が生えてくることは知っていたが、まさか自分がそんな年になっていたとは知らなかった。こんな毛がぼうぼうと生えてしまったら、まるで能面の翁のようではないか。それはともかく、この写真こそ合成以外の何物でもない。だってそうだろう、瞳の中に何かが映るとしたら、それはこの写真を撮ったカメラ以外ありえないじゃないか。マジックミラーを使ったものでもない。なぜなら、瞳の中に映るもうひとつの顔は最初の顔と同じ向き、つまり左右が逆転していないから、鏡に映ったものではありえないのだ。画像を拡大したあなたは、瞳の中の小さな顔の、その瞳の中にもうひとつ小さな顔が隠されていることに気づき慄然とする。ここには何か執念じみたもの、偏執的な細部へのこだわりが現れている。いったい誰が何のためにこんな小細工を弄したのか見当もつかないが、その目的があなたを不安にさせることだとしたら、すでにその目的は十分に達せられている。

封筒の宛名と三枚目の写真の裏に記された謎の四文字「FYE0」のフォントが自分のパソコンにもインストールされているのを知ってあなたは軽い驚きを感じる。VT100という名前から察するに、これは初期のUNIX

マシンの画面で使われていたフォントを模したもののようだ。仕事に使っているWindowsマシン、それからサーバー用のLinuxマシンを次々に立ち上げ、あなたはそれぞれにインストールされているフォントを調べてみる。件のフォントはマッキントッシュにしか載っていないようだ。ということはつまり、この手紙の送り主は少なくとも一台のマッキントッシュを所有しているということなのだろうか？

これらの画像の送り主はいつたどこからあなたの画像を入手したのだろう。アマチュアのオンライン作家でもあるあなたは自分の顔写真をインターネット上に公開してはいる。だが、これらの画像のどれもが公開された画像とは異なっている。めったに外出しないあなたの姿を盗撮するのは難しいことだろう。だから例えば何かの集まりに出席したあなたの写真がインターネット上のどこかにくたとえそれが公開されていなくても存在する可能性の方がずっと高そうだ。あなたはつい最近入手した画像検索用ソフトを使ってみようと思いたつ。

インテリジェントかつファジイな検索を売り物にしていろいろらしいそのソフトは試用版を無料でインターネットからダウンロードしてきたものだ。あなたは自分の顔写

真を検索用のウィンドウに貼り付け、「厳密」検索を指定して検索開始のボタンをクリックする。あとはこのソフトがあなたの顔の特徴を抽出し、その特徴を備えた人物のポートレートを拾い上げてくれるだろう。インターネット上にはいったいどれほどの画像ファイルが置かれているのだろうか？ おそらく何万といったオーダーではおさまるまい。億単位？ それを片っ端から検索しようというのは無謀なんじゃないだろうか。結果は順次表示されるとはいえ、そもそもこんな検索に終わりがあのだろうか……

長時間の作業を予想して一息いれようと椅子から立ちあがり、あなたは飲み物を作りに行く。アイリッシュウイスキーのお湯割りを満たしたマグカップを手に仕事部屋に戻ったあなたは検索完了を示す旗が画面上に立っているのに気づいてちよつと驚き、やがて苦笑する。ウェブ上のデータを検索する代わりにあなたはローカルのハードディスク、今あなたが使っているまさにそのマシン内のデータを検索してしまったのだ。どうやらソフトの設定を間違えたらしい。やれやれ、と呟きながら検索結果に目をやったあなたは今度はあつと声を上げる。そこには送られてきた写真そのままのあなたの顔写真が小さく表示されているではないか…… 画像を拡大してみる。

間違いない。送られてきたものとまったく同じもので、ただ瞳の中にあなた自身の像が映っていないだけだ。いったいいつ撮影したものなのだろう、まったく覚えがないがと思いながらあなたはその画像ファイルの作成日を調べてみる。半ば予想していた通り、その日付は送られてきた写真と同じ未来のものだ。ファイルが置かれていたフォルダを調べたあなたは、そこに合成写真の要素をすべて見出す。白人のピアノリストがアツプライトピアノを弾いている写真、パソコンに向かうあなたの横顔、どこかのパブかなにかで撮影されたらしいスナップ、妻の若いころの顔写真……。あなたはようやく、二枚目の写真に写っていた女性の正体を理解する。この顔はあなた自身の顔と妻の顔とを合成したものだ。だからこそ見覚えがあると同時に見たことのない顔だったのだ。だが、たとえばあなたはマグカップからごくりと酒を飲み、舌をやけどしそうになる。一体だれがどうやってこんなファイルをおれのパソコンに仕込んだんだ？

妻はメールのやりとりとウェブページを覗き見るくらいにしかパソコンを使わず、画像を加工するなどといったスキルは持っていない。ここはあなたの仕事場で他には誰もこのパソコンを使う者はない。外部からネットワーク経由で侵入してファイルを置いていった奴がいるの

か？ いったい何のために？ そもそもそんなことができるのなら何だっつてわざわざ合成写真をプリントして送りつける必要があるんだ？ あなたはマグカップの中身を半分ほど一気に飲み干し、画像が置かれていたフォルダの名前を凝視する。

"DominaFormicae"

ドミナ・フォルミカエ。ラテン語だろうと見当はつくが、意味はわからない。あなたは眠れないままインターネットを漂流し始める。

10

仕事中にふと思いついたあなたはフォルダの名前に使われていた単語をオンライン辞書で引いてみる。やはりラテン語だ。domina は英語なら 'lord'、日本語なら主（しゅ）といったところ。あなたはフォーレのレクイエムの歌詞を唐突に思い出す。リベラ・メ・ドミネだったろうか、主よ憐れみたまえ？ 違ったかしら。ラテン語は苦手だ。解剖学実習を思い出してしまふ。formica はなんと蟻という意味らしい。formic acid ≡ 蟻酸。フォルマリン。ホルムアルデヒド。なるほど。ならばドミ

ナ・フォルミカエはさしずめ「蟻の王」だろうか。蟻の社会には女王しか存在しないのだから「蟻の女王」が正しいのかも知れない。蟻の王とはなにやら滑稽で悲しげだ。蛇の王Ⅱバジリスクや蠅の王Ⅱベルゼブブの方がよっぽどましではないか。

やがてあなたのもとに *Domina Formicae* と名乗る団体からのメールが届きはじめる。それはどこか狂信的な匂いのする新興宗教団体であるらしい。私のところに写真を送って寄越したのはあなたがたですか？ 礼儀正しくあなたは尋ねてみるが相手はそれには答えず、あなたに対する場違いな感謝の辞を連ねるばかり。いわく、最初にして最後の予言者であるあなたにわれわれは衷心から感謝の意を表します……われらの主を戒めより解き放ったあなた……あなたは主を見出し、主はあなたを見出したのです…… 予言？ 予言って何です？ 私には何のことなのかさっぱりわからない。それよりも私が知りたいのは画像ファイルを仕掛け、合成写真を送りつけ、今またこうしてばかげたメールを送ってくるあなたがたの意図です。いったいぜんたいあんたたちは何をたくらんでいるんだ？ お忘れになったのですか？ あなたは以前に参加されていた同人誌でわたしどもの教団についてお書きになったではありませんか…… 教団から今度

は多色刷りの豪華なパンフレットが郵送されてくる。そこにはまたしてもあなたの顔写真が転載されており、「予言者のプロフィール」と題されたページには件の同人誌から引用されたらしい短い文章が載っている。ようやくあなたは思い出す。何年も前に書いた短い小説の中で、あなたはインターネットを神とあがめる宗教団体を登場させたことがある。ディックの描いたVALIS：Vast Active Living Information System とはインターネットそのものだというわけだ。だが、たかだか数百部しか印刷されず、さらにその大半が売れ残るようなおおよそマイナーな同人誌に載った架空の団体が現実に存在するなんて、ばかげた話じゃないか。クルムヘトロジャンじやあるまいに。これは悪質な冗談か、さもなければ偏執狂のしわざに違いない。そもそも Domina Fornicae なる団体が実在するという証拠はどこにある？ メールアドレスなんてあてにならないし、パンフレットだってパソコンとプリンタで作れないことはあるまい。このパンフレットには教団本部の所在地が書かれていないじゃないか。

あなたの執拗な追及に耐え切れず、教団は少しずつ人間の貌を見せ始める。電子メールからFAX、電話そして生身の人間とのやり取りへ。

晩秋のある日、あなたは指定された喫茶店で自称教団幹部の若い男と対峙する。何の特徴もない男。中肉中背、髪は長からず短からず、声は高からず低からず、アクセントは標準的で服装は没個性的。平均的日本人男性というものを合成したらこんな男になるのではないか。誰とも似ているようで誰にも似ていない。あなたはようやくつかんだはずの教団の尻尾がトイレットペーパーの切れ端にすぎなかったような気分になる。どこからかあなた自身の声が聞こえる。

「ぼくはてつきり同人の誰かのいたずらだと思ってたんだけどね」

「ですから何度も申し上げたように、われらの主があなたの予言を見出されたのです」「例の同人誌のこと？」

「それだけではありません。秘匿された経典のことをお聞きになったことはありませんか」

「いや全然」

あなたはわざとぞんざいな口をきいて男を挑発しようとするが、特徴のない男はいつこうに動じない。

「チベットの高僧たちは後の世のためにしたためた経典を寺院のどこかに隠しておくのです。それは誰の目にも

ふれることなく長い間眠り続け、それが必要とされる時に奇跡のように見出される」

「ぼくがそんなものを書いたと?」

男は自分が注文したコーヒーに口をつけようともしない。まるで唾液という証拠を残さないよう用心しているかのようだ。

「あなた自身が理解しているあなたではないかも知れません。予言者としてのあなたは現身のあなたとは別の時相にあるのです」

「またわけのわからんことを…… 写真を送ってきたのはあんたらなんだろ?」

「それはわたしの口からは申し上げられませんが、いずれ明らかになることです」

「いずれいづれって、さつきからそればかりじゃないか。そもそも何だかってわざわざ未来の日付をつけて寄越したんだ?」

そのことでしたら、と男は謎めいた微笑を浮かべる。アルカイック・スマイルってやつだ。全感情の中間地点。男の表情がその時仏像そっくりになる。半眼半口。上まぶたに隠れた半分の目は彼岸を見ているのだろう。

「わたしどもは独自の暦を用いているのです。あなたがたの世界からはちょうど百日離れている計算になりますか」
「するとあなたは未来からの使者ってわけだ」
「そういうことになりますね」

男は悪びれずに即答する。あなたは意地悪く尋ねてみる。

「百日後の世界がわかるとは便利だね。投機もギャンブルも怖いものなしだ」

「さよう、教団の資産運用に大いに役立っております」

（じゃあここ三ヶ月の間に高騰する株の銘柄を教えてくださいませんか）と言いかけてあなたは思い直し、

「百日後のぼくはどうしてます？」と質問する。

なぜそんなことを訊く気になったのかは自分でもわからないが、それは男の動揺を誘うパスワードであったらしい。男は一瞬ためらって人間の顔に戻り、さも言いにくそうに眉をひそめながら小声で呟く。かすれたその声があなたにはどこか別世界から聞こえるような気がする。

「まことに申し上げにくいことですが、その時あなたはもうこの世にはおられないのです」

(予言者だって？ おれが？)

男と別れたあなたは繰り返し自問する。予言者はむしろあの男の方じゃないか。予言、というよりも予告された死があなたの気分を重く沈ませる。偏執狂の妄想さ、とうそぶいてみてもあなたの気分は晴れない。余命三ヶ月か、せめて一年ぐらいは残してもらわないと予定の立てようがないじゃないか。少々肥満ぎみで酒を飲みすぎているかも知れないが、健康には自信がある。突然ぼっくり逝くような病気とは無縁なはずだ。ならば事故だろうか、それともあいつがわざわざおれを殺しにやってくるとか？ いや、そんな大それたことをしでかしそうな奴じゃなかった。あいつは、と言いかけたあなたはもはやその顔を思い出せないことに気づく。あいつはメガネをかけていたろうか？ ヒゲは生やしてなかったか？ はげてはいなかったか？ いやそもそも男だと決めてかかったのが間違いかも知れない。記憶があまりにあやふやで吐き気を催しそうだ。そもそもこれは脅迫ということにならないのだろうか……

妻が勤務する病院の忘年会に招かれたあなたは話相手もないままひとりで杯を重ね、酔ったので先に帰ると言いおいて席を立つ。あなたはあてもなく繁華街をさまよい、酔いを覚ますのに適当な場所を探す。ふと目についた「蟻の王」という看板に惹かれてあなたは狭いビルの階段を手すりを頼りに下りていく。

(まさかここが教団本部です、なんていうんじゃないだろうな)

扉を開けるとなんの変哲もないスナックで、隅の席に案内されたあなたは冷たいウーロン茶を注文する。やけに静かな店だな、あなたは店内を見渡してみるが、ボックス席に座っている客たちの顔は見えず、ささやき声とグラスに氷がぶつかる音しか聞こえてこない。BGMさえ流していないようだ。女の子が運んできた盆にはウーロン茶のグラスと大きなアイマスクみたいなものが載っている。

「これ、試してみませんか？」

「目隠し?..」

「いいえ、その反対。別の世界が見えるもの、ほら」

言いながら女の子があなたの目の前に差し出したマスクはなるほど半透明で、それを通すと天井の明かりがシヤンデリアか何かのように煌いて見える。

「ヒーリングって言うんですか、疲れを取る効果があるんですって」

いくら？と聞こうとしたのに先回りして

「今ならお試し期間で無料です。みなさんお付けになってるんですよ、ほら」

女の子が振り返る方を見ると、いくつかのボックス席から黒いマスクを掛けた顔があなたを見ている。異様な雰囲気呑まれてあなたはマスクを顔に当てる。目と耳をすっぽり覆われたとたんに世界が一変する。

最初のうちあなたは自分に何が起きたのか理解できない。光と色の洪水のただなかに放り込まれ、大きな波に翻弄されているような感じ。自分の身体がどこにあるのかわからない。手探りでさつきまで腰掛けていた革張りのソファを探し、腰を下ろしてみるがそのソファも生き物のように脈打っている。さつきまで静かだった店内に今は音があふれている。澄んだ打楽器の音。少しずつリズムをずらしなが

ら繰り返し演奏される単調なメロディー。気分は悪くないが、これではまるでドラッグでも服んだみたいじゃないか。あなたはマスクを外そうとするが手が届かない。自分の顔が恐ろしく遠くにあるのだ。さっき飲んだウーロン茶に何か混じっていたのだろうか？

女の子を詰問しようと振り向いたあなたは、送られてきた写真と寸分たがわぬ顔をそこに見出す。妻とあなたの顔をモーフィンングした顔。未だ生まれていない娘の顔だ。いつの間に着替えたのだろうか、チュニツクとでも言うのか、ゆったりとした絹のドレスを着てにこやかに微笑んでいる。気がつくと店じゅうの客が身体を乗り出してこちらを見ているではないか。みんなマスクを取り去っていて、誰もが幸福そうに微笑んでいる。あなたの心から疑念が消え、代わりにとてつもない幸福感が沸きあがってくる。あなたは哄笑する。あなたの笑いに共鳴して打楽器のテンポが速まる。

「おかえりなさい」

誰かが声を掛ける。そうだ、おれは今こそ帰ってきたのだ、長い長い遍歴の果てに。壁には真紅のドレープがめぐらされ、そこには金糸で縫い取りがしてある。忘れ

ていた神の名前。あなたは導かれるままにピアノに向かって腰掛ける。そうだ、あの写真は合成などではなかったのだ。フラッシュが焚かれ、あなたは即興曲を奏でる。ピアノなど一度も習ったことがないが、すべてを思い出した今のあなたならパソコンのキイを叩くように楽々と弾くことができる。写真にうつっていたのは目隠しなどではなく、このアイマスクだったわけだ。

ふと鍵盤を叩く両手を見たあなたは恐怖に凍りつく。これはおれの手じゃない。鍵盤を叩き続ける両手は見る見るうちに長い毛に覆われ、まるで猿か狼男の手のようになる。誰かこの音楽を止めてくれ。おれは気が狂いそうだ。

「おれは……」

「お客様、すみません、そろそろ閉店の時間なんです」

あなたはあわてて口元からよだれをぬぐい、女の子に笑いかけようとす。

「お取りしますね」

外されたのをみるとただのアイマスクにすぎないよう

に見える。

「ぐっすりお寝みになってましたよ」

「いびきをかいてた?」

「少しだけ」

微笑む女の子の顔がほんの少しだけ幻の娘に似ている気がする。勘定を済ませたあなたは店からのお土産です、と一枚のフロッピーディスクを手渡される。きれいに彩色されて店の名前と電話番号が記してある。

「コースターなんです。いらないフロッピーを使ったマスターの手作り」

「何かデータが入ってるの?」

「かも知れません。でも開けない方がいいと思いますよ、マスターって悪趣味だから」

(ウイルスが仕込まれてるんです。それも人間に伝染るやつ)

「え?」

女の子が一瞬目を伏せて呟いたような気がするが、気

のせいだったのかも知れない。あなたは妙に晴れ晴れした気分です店を出て、タクシーを拾って家路につく。

100

軽い頭痛をおぼえながらあなたは目をさます。妻はもう出勤したようだ。パジャマのまま起きだしたあなたはスナック「蟻の王」の女の子から手土産に渡されたフロッピーディスクをノートパソコンのドライブに放り込み、中身を覗いてみようとする。中には見慣れない拡張子を付されたファイルがひとつ入っているだけで、ファイルのアイコンは冠を被った蟻を模している。蟻の王というわけだ。ファイルサイズは百四十テラバイト。うっかり見過ごしそうになったあなたはその単位に目をみはる。テラバイトだって？ キロバイトじゃなくて？ DOS フォーマットされた両面倍密度フロッピーディスクの容量は約一・四メガバイト。ハードディスクの単位として今では一般的になったギガバイトというのはメガバイトの千倍、テラバイトはさらにその千倍だから、このファイルはなんと入れ物の容量の一億倍の大きさを持っていることになる。そんなばかな。何かのトリックなのだろうが、どういう仕掛けなのか、あなたには見当がつかない。ファイルをダブルクリックしてみると、クリエータ

ーすなわちこのファイルを作成したソフトが見当たらないという返事の代わりに、メモリが足りないというアラートが返ってくる。あなたが趣味の○○の製作や作曲に使っているノートPCはそれなりに大きなメモリを積んでいるのだが、それでも処理しきれないほどのデータがたった一枚のフロッピーに詰まっているとでもいうのだろうか。

フロッピーディスクからマシンのハードディスクにファイルをコピーしようとしても同じ結果になる。あなたはドライブからフロッピーをもう一度取り出してしげしげと眺めてみる。表面のサイケデリックな迷彩を除けばなんの変哲もないただのノーブランド品だ。どこかで秘密裏に開発された超高密度のフロッピーなどではない。いや、例えそんなものがあつたとしても普通のパソコンのドライブで読み取れるはずはないし、そもそもフロッピー自体の容量はふつうに一・四メガバイトと表示されるのだ。

ふと思いついてあなたはそのフロッピーを仕事に使っているデスクトップPCのドライブに放り込んでみる。マシンとの相性といった他愛もない問題にすぎないのかも知れないからだ。ファイルサイズはやはり百四十テラ

バイトと表示される。ばかげていると思いつつもあなたはそのファイルをダブルクリックしてみる。すると意外にもフロッピーディスクドライブがかちかちと音を立てながら動き始め、そのままいつまでも読み取りを続ける。オレンジのLEDが忙しく点滅しているから、フロッピーへの物理的なアクセスは続いているらしい。だが、それにしてもこれでは埒が開かない。コンピュータの動きを危うくするウイルスでも仕込まれていたのだろうか？

あなたがパソコンを強制終了させようとしたちようどその時、見覚えのある画像がCRTに映し出される。送られてきた三枚目の写真と同じ、まっすぐこちらを見つめるあなた自身の顔。その目に浮かぶ表情が実は恐怖とあきらめであったことにあなたは気づく。顔は次第に大きくなって画面からはみ出し、今度はその瞳の中にあった小さなあなたの像が拡大され始める。そしてまたその瞳の中の顔が。無限の入れ子になったあなた自身の顔が恐怖に目を見開きながら次々と近づいては去っていく。どこまでも拡大可能な画像…… そんなはずはない。そんなものがあつたとしたらそのファイルサイズは無限大になってしまう。これは簡単なトリック、一連の画像を繰り返しループバックしながら表示させているだけなのだろう。だが、よりによってなぜあなた自身の

顔なのだ？

単に作成された日付の一番新しい画像が選ばれただけだろう、あなたは自分にそう言い聞かせる。とにかくこの永劫回帰は神経にさわる。実行中のプログラムを止めようとあなたがキーボードに手を伸ばすのを察したかのように、画像の動きが一段と早まり、ついには肉眼では識別できないくらいスピードに達する。めまぐるしく変わり続ける画面から、やがてある恒常的なパターンが現れる。何か画面の中でうごめいている。あなたはその動きから目をそらすことができない。いつの間にか画面はせわしなく動き続ける無数の蟻によって埋め尽くされている。でたらめに動き回り、ぶつかり合い、互いを食い合う無数の蟻蟻蟻蟻蟻、そのおびただしい数！ そのうちに画面を構成するドット数よりもはるかに多そうな（そんなばかな！）蟻たちが、ひとつひとつはランダムに動いているように見えながら、全体としてあるパターンを示していることにあなたは気づく。それは笑いだ。具体的な誰かの笑顔というのではなく、かといってニコニコマークのように様式化されたものでもない、原型としての笑い。それも苦痛を伴うような痙攣的なものだ。画面から立ちのぼる哄笑はすべてを呑み尽くして何も生み出さない空疎な笑いそのものなのだ。ふつう混沌

と訳されるギリシア語のカオスは、あくびをするという意味の動詞から来ているのだという、あなたはそんなことを唐突に思い出す。ぽかんとあけた口、宇宙の始まりの虚無……そして、始まったときと同じように突然、蟻の群れが画面から消えうせ、あとには真っ白なスクリーンだけが残る。

それきり何も起こらない。パソコンを再起動すると何もなかったかのようにいつものデスクトップが表示される。フロッピーディスクの中身を確認しても中には何もなく空っぽになっている。あなたはこのパソコンがインターネットに接続されていたことを思い出す。あなたは何か禍々しい存在をネットに解き放ってしまったのではないだろうか。世界を呑み尽くしてやろうと待ち構える魔物が閉じ込められていた瓶のふたを開けてしまったのは誰だったろうか。

101

ある日、ウイルス駆除ソフトの定義ファイルをアップデートしようとしたあなたはコード名Pandoraという新たなウイルスの情報を見出す。感染力は抜群でネットワークを行き来するどんなパケットにも容易に取り付い

て広がっていくそのウイルスはOSを選ばないのだという。しかも感染した直後に自分自身を複製してばらまいた後ではレトロウイルスのようにOSのソースコードに紛れ込んで見分けがつかなくなるというのだ。その一方、奇妙なことにウイルス感染による直接の被害は報告されていない。ワクチンの開発は困難を極めているようだ。このウイルスはまるでエイズやインフルエンザのウイルスのようにひんぱんに突然変異を起こして駆除に抵抗するのだという。あなたはこのウイルスの行方に興味を抱いて情報を収集する。これこそあなたがネットに解き放った魔物、パンドラの函に閉じ込められていたプログラムではないだろうか？

インドのとある工科大学の講師がパンドラに感染したと思われるネットワークの作業効率が大幅に改善されたという報告を発表し、「有益なコンピュータ・ウイルス出現?!」という見出しがニュースサイトを飾るが、追試の結果はまちまちで、ついにはパンドラなるウイルスの存在自体が手の込んだジョークに過ぎないという論説が出現し、以後このウイルスに関する情報は潮が引くようにネットから消えてしまう。関連する記事をもう一度読もうとしたあなたはその記事がニュースサイトからもローカルのハードディスクからも消えていることに気づ

いて愕然とする。いや、そもそもあなたは何を探そうとしていたのだったか、いまとなつてはそれすらも思い出せない。プリントアウトしたはずの記事もいつの間にか捨ててしまったようだ。あなたはもはやパンドラという名前さえ思い浮かべることができない。

世間とあなたがパンドラの存在を忘れたころ、無名の疫学者が「パンドラは人間に感染するウイルスだ」という珍奇な説を唱えるがほとんど黙殺されてしまう。もちろん人間の身体の中でコンピュータウイルスが増殖できるわけではない、だが、と彼は力説する。ウイルスに感染したコンピュータが人間社会に影響力を及ぼすことは可能なのだ。どのような方法によつて？ 方法はいくらでもある。例えば子供が反社会的なあるいは性を売り物にしたウェブページにアクセスできないようブラウザの動作を制限するソフトがあるだろう、ああいうふうにはブラウザの動きを監視し、アクセスできるページにあるバリアスを掛けることは容易だ。たとえば誰かが原子力発電所や巨大なダム建設といった物議をかもし話題についてインターネットを調べようとした時に、推進派を擁護するような情報だけが表示されたらどうだろう。反対派の人間を説得することはできないかも知れないが、どつちつかずで立場を決めかねている人間をある方向に振り

向けることは可能だろう。それがほんの一部であったとしても、何万人、何億人が手にする情報を少しずつ操作すれば、あるいは世界の動きを左右する事だって不可能ではあるまい。閩域下知覚による、いわゆるサブリミナルメッセージを使うという手も考えられる。スクリーンセイバーに割り込んで、数十ミリ秒ごとにある行動を訴えるメッセージを表示するソフト。「〇〇社に投資しよう」「気に入くない隣人は抹殺せよ」といった直接的なものでもいいし、あるいはある特定の視覚パターンと情緒的な映像を交互に繰り返し見せるだけでいいかも知れない。腐乱死体の目をそむけたくなるような画像とある特徴的な色とを交互に見せられた人間はその色を目にするたびになぜか不快になるかも知れない。あるいは……パンドラが蔓延して以来、世界各地の自治体首長選で意外な候補者が続々と当選しているという事実を、彼はウィルスの影響の一例として挙げてみせる。

やがて業界最大手のゲーム機メーカーとソフトウェア会社がタイアップしたモバイル仮想現実ギアが発売され、爆発的な流行を見せる。FORMICAと名づけられたその端末は全視野を覆う大型のサングラスに似た半透過型液晶スクリーンとサラウンドスピーカシステムが一体となったもので、仮想現実空間内のシミュレーションゲー

ムに使えるほか、時計、テレビ電話、ナビゲーションシステムなどさまざまな機能を搭載している。米国には同名の合成樹脂塗料メーカーが存在していたが、巨額の権利金と引き換えに商標を譲渡するに至る。フォーマイカとはラテン語で蟻を意味している。その端末は正面から見ると一切光を反射しない暗黒がそれを装着している者の顔面に張り付いているように見えるのだが、やや斜めからだとな数のピンの頭が黒光りしているようにも見え、いわば昆虫の複眼そっくりなのだった。フォーマイカは単なるコンピュータ・ディスプレイではなく、人間の視覚を増強するものだというのがメーカーの言い分で、フォーマイカを通して見る世界は肉眼で見るとは異なるかに美しく好ましいと愛用者は語るのだった。知覚を惑乱するドラッグ類似の作用がささやかれ、乱用を案じる声も聞かれたが、そんな声はたちまちかき消されてしまう。国民的アイドルグループが、スポーツ選手が政治家がいち早く愛用しはじめたからだ。新しいものには目のないあなたもサングラス代わりにフォーマイカを掛けて外出するようになる。何よりも驚くべきことは、このシステムはそれを装着している者同士の間ではほとんど目立たないという事実だ。フォーマイカを装着して街に出たあなたは、向こうから歩いてくる女の子がフォーマイカを掛けていることを彼女の両目と両耳のまわりが微細な宝

石でもばらまいたようにきらきらと輝いていることから察することができる。だがあなたは同時に彼女のまなざしを普通よりもはつきりと見て取ることができるのだ。濡れたような瞳の色が素敵だな、とあなたは思う。もしもあなたが今ここでフォーマイカを外したら、彼女の顔を半ば以上覆った黒いついたてを目にすることだろう。だが、誰が好んでそんなものを見たがるというのだ？

110

あなたが例のスナックで試したサングラスはまさにこのフォーマイカのプロトタイプだったに違いない。だが、仮にも名のある企業連合がそんなゲリラ的な方法で試作機のデータを集めたりするものだろうか？ あのフロツピーに仕込まれていた妙なプログラムとフォーマイカとは無関係なのか？ あなたはフロツピーに記されていた電話番号を何度かプッシュしてみるのが、留守電につながるばかりで誰も応答しない。業を煮やしたあなたは記憶を頼りにスナックを訪ね歩き、ついにあの晩の建物を見出すが、階段の降り口に看板はなく、階段を下りた突き当たりには塗り込めたような白い壁しか見つかからない。

ここ一連の出来事はいったい何を指し示しているのだ

ろう。日に日にあなたの不安は募り、あなたは眠れなくなる。妻に頼んで処方してもらった睡眠導入剤は常用量ではほとんど効果がなく、あなたはひそかに同じ薬を手に入れて毎晩倍量を服用する。大量を長期連用すると幻覚や妄想を伴う急性精神病に似た状態が引き起こされる可能性があることをあなたは知っているが、すでにあなたは薬を止めることができなくなっている。あなたの不調を察しているはずの妻は、まじかに迫った精神保険衛生法指定医の審査に提出する症例報告をまとめるのに忙しく、それを斟酌する暇がない。

スナック「蟻の王」でフォーマイカ（の試作機？）があなたに見せた幻覚が、例の写真と寸分違わぬものだったという事実は別に不思議でもなんでもない。写真が最初にあり、その意味を解釈しようとしたあなたの無意識が奇妙な夢を見せたのだから。問題は写真に記されていた日付けとあなたがスナックを訪れた日付けが一致していたくあなたはなんどもスケジューラで確かめたくことだ。だがこれとて偶然の一致と言えないことはないし、例の教団が百日先を見通していることの証拠にはなり得ない。（だとすればあなたの寿命はあとひと月足らずで尽きてしまう。）やはり本当に問題なのは、合成写真の素材がすべてあなた自身のパソコンで見出されたことな

のだ。すべてを説明しうる仮説がひとつだけあることにあなたは気づいている。考えてもみろ、あなたは呟く。一連の事件の物理的証拠として何が残されているか。三葉の写真とフロツピーが一枚、それだけではないか。残るすべてはおまえの妄想にすぎないと言われても、おまえには反論するすべがあるまい。

あなたは思い余って中学時代からの旧友に電話で相談をもちかける。

「……やあ久しぶり。ほら、昔おれの部屋で徹夜で百物語をやったことがあったろう、あのおきにお前が話してくれた怪談のひとつが気になってさ。ああ。いや、そうじゃなくて、ちよつと話のタネに使えないかと思つてさ。うん。雪山でロケ中に気にくわない俳優だかなんだかをスタッフ全員で殺して埋めたつていう話。覚えてないかなあ、埋めたはずの死体が翌朝ロッジの外に転がつてたつていう……そうそう、何度埋めても戻つてくるんだ。それで、何が起きてるのか調べるために一晩中カメラを回しっぱなしにしてたら、夜中にそいつを殺した連中が全員ふらふら起き出してきて、埋めた死体をまた掘り返すのが映つてたつていうオチのさ。そうそう。つまり、罪悪感からというか自分たちを罰するためなんだか、自

分で掘り返しておきながらそれを忘れて怖がってたって
いう話なんだな。そんなことって実際にあるものなんだ
ろうか。だってお前、心理学専攻だっただろう？ 神経
症ではあり得るって？ 何、手塚治虫のマンガ？ 知ら
んなあ。呪いのワラ人形を自分で作って自分の部屋のド
アに掛けて大騒ぎする主人公ねえ……ああ、ありがとう、
参考になったよ。じゃあまた、たまには遊びに来いよ」

女房も会いたがってるから、と言いかけたとき、あな
たはふいに携帯電話が重くなりだしたことに気づく。ま
るで鉛できてきているかのように重く、冷たく、毒を含ん
でいるかのようにくすんだ光を放ちだしたそれをやっ
との思いで耳に近づけると相手がまだ何かしゃべり続け
ている。だがその声は生気を失い、相手の声の特徴をすべ
て備えていながら何か別のものに変質してしまっている。
まるで音素をばらばらにしてからでたらめにつなぎ合わ
せたかのような。あなたは彼の言うことばがもはや理解
できない。

「箱を開ける……ネットワークに解き放て……死と再生
の箱を……」

あなたの手から携帯電話がすべり落ち、ゆっくりと落

下して床にめり込む。

111

教団からはその後なんの連絡もなく、送られてきたパ
ンフレットに記されていた「PR」にはアクセスできない。
残された手がかりは、と考えたあなたは教団の言う予言
なるものがどこかに隠されているのではないかと思いた
つ。男が語った埋蔵経のように、あなた自身がずっと昔
に書いたものがどこかにあるかも知れないではないか。
別に抑圧だとか解離性記憶障害なんぞ持ち出すまでもな
い。単に書いたことを忘れただけだ。だがどこに？ 十
年ほど前からあなたは自分が過去に書いたものをすべて
デジタル化してバックアップを取り、紙に書いた原稿は
焼き捨ててきた。探すべき場所は電腦世界以外にない。
あなたは自分がインターネットに載せる原稿を打ってい
るノートパソコン内のファイルを片っ端から覗いてみる。
書き留めたことさえ忘れていたさまざまな覚書、FAX
送付状、手紙のたぐいが次々と出てくるが、予言書めい
た文章はどこにも見当たらない。もちろんあなたは自分
の書いた小説や詩が掲載されているオンライン雑誌をく
まなく検索してもみるが、結果は変わらない。

ブラウザを終了しようとして、ふとあなたはブラウザの「お気に入り」フォルダを調べてみる気になる。几帳面なあなたの性格を反映して整然と分類されたフォルダ内のURLにアクセスしていくうち、あなたは「アーカイブ」と題された見慣れないフォルダ内にたったひとつ、*“DominaFormicae”*へのリンクを発見する。ある期待を抱いてブックマークをクリックしたあなたは、サイトの入り口でパスワードを要求される。英文の説明によると、そこはインターネット上に置かれた仮想金庫であり、顧客はどんなファイルでも無期限に預けておくことができるらしい。ユーザ名の欄にはあなたのペンネームがある。はじめ表示されており、パスワードの入力をうながすカーソルがその下の欄で点滅している。試みにあなたは使い慣れたいくつかのパスワードを打ち込んでみるが、どれも登録されたパスワードとは違っているという警告が返ってくるばかり。あなたはパスワードを忘れた顧客のふりをしてパスワードを取り寄せようとする使用規約のページにジャンプしてみるが、そこには一度入力されたパスワードはいかなる理由があっても照会することはできないという説明が大文字で強調されている。あなたは捜し求める予言がこの金庫に保管されていることを確信するが、金庫を開ける鍵は自分で見つけなければならぬようだ。パスワードは英字と数字の組み合わせでなければ

ばならず、十文字以上十四文字以内という決まりになっている。あなたは送られてきた写真の裏に記されていた“FYEO”という四文字を思い出すが、これではもちろん字数が足りない。そもそもこれはどういう意味なのだろう。何かの略語だろうという見当はつくが、果たして何の略なのか……。その時あなたはずっと以前、学生時代に当時付き合っていた彼女と見た映画のことを思い出す。彼女が好きだった映画、〇〇七シリーズの一作はたしか「ユア・アイズ・オンリー」というタイトルで、その中で極秘を意味する言い回しとして“for your eyes only”というのが出てきたはずだ。これを略せばFYEOになるではないか！だが、このままでは字数が多すぎる。ForYourEyesOnly とインターネット風に縮めても十五文字あって字数制限を越えてしまう。では、これならどうだろう。あなたはパスワードの欄に“4YourIsOnly”とひょう十一文字を打ち込む。

金庫はあっさりと扉を開ける。マンガめいた金庫の扉が開くアニメーションが擬音とともに再生され、あなたは苦笑を漏らす。金庫の中には何の変哲もないテキストファイルがひとつ保管されているばかり。使用料だってばかにならないだろうに、とつぶやいたあなたは他ならぬ自分の口座から料金が引き落とされていることを思い

出して無然とする。こんなたちの悪い冗談を仕掛けているのはいったいだれなのか…… テキストを開いたあなたはさらに困惑する。これは一体何だろう。まるで酔ったは沈黙を表すらしい空白や「えーと」「あー」「うーん」といった意味のない間投詞を省き、繰り返しの多い文章を要約しようとするが、その文章ときたら支離滅裂でほとんど意味をなさない。なんとか読み取れるフレーズといえば「インターネット・ガイアの誕生」「ひとつのコンピュータがひとつの脳細胞となる」「コンピュータ・ウイルスが人間に感染する可能性は？」といった意味不明のもので、このどこが予言なのかとあなたはいぶかしくむ。「神は因果律を超越している。だが、神は人間に発明されなければ存在しえない」……単なる出来損ないの警句じゃないか。これは巧妙な暗号文なのだろうか？ それともこれはやたら大掛かりなだけで意味のない冗談なのだろうか？

あなたが予言の書を解読しようとしてやっきになっているちょうどその時、妻の職場にあなたの友人が電話を掛けてよこす。仕事中に申し訳ないと断りながら、その声はあなたについてどうしても知らせておかなくちゃいけないことがあると告げる。

「あいつ、最近どこか具合の悪いところはありますか？
いや、この前あいつから電話があっただけど、ちよつ
と疲れてる様子だったから」

ここで声は一段と低くなり、あなた自身の知らないあ
なたに関する事実を妻に語りはじめる。

「実はここだけの話、あいつ、学生時代に一度変調を来
たしたことがあるんだ。いや、大したことじゃなくて、
うちの教室でカウンセリングを受けたらすぐによくなっ
ただけど、ちよつとした妄想めいた考えに取り付かれ
たみたいで。そう、ちよつと頭が良すぎてさ。でも、よ
くなつた後はそんなことがあつたことさえ忘れてるみた
いだから、変に刺激しないほうが。ま、なにかあつたら
連絡してよ。いつでも相談に乗るから。じゃあ」

1000

「やったあ！」

妻の部屋から歓声が響いてくる。このところ何やらふ
さがちだった妻が久しぶりに晴れ晴れとした笑顔をた

たえて部屋から出てきたのであなたは心なしほつとする。

「指定医の合格通知がメールで来たの。よかった、てつきり再提出かと思つてたんだけど」

「そいつはおめでとう。そんな通知もメールで来るんだ」

「そうよ、正式な認定証はもちろん郵送だけどね」

ああそれにしても本当に良かった、といいながら妻はソファに腰を下ろす。実は論文審査を担当したことがある先輩に提出した症例報告を見てもらったところ、いくつかの点で致命的なミスがあつて、これでは通らないだろうと言われていたのだと妻は打ち明ける。そうかそれでふさいでいたわけね。そうよ、だつて再提出なんてことになったらまた研修先の病院まで足を運んで病歴の調べ直したものの、妻は両足をぶらぶらさせながら歌うように答える。で、資格が取れるとどんなことができるんだっけ？ あら資格を取らなきゃ精神科医なんて何もできないのよ。何も？

「そう、この資格があれば本人の同意がなくなつて患者を精神病院に収容することができますのよ」

「誰でも？」

もちろん、妻は少し胸をそらし、おどけたようにあな

たを指さす。

「あなたでもね」

久しぶりのセックスに疲れたあなたがたは翌朝そろって寝坊する。メールをチェックする間もなく出かけた妻は電車の中で携帯電話のフリックを開く。同業者のメーリングリストや友人からのメールにまじって「まりあへ」というタイトルを見つけ、妻は軽い胸騒ぎをおぼえる。発信者は夫だが、夫はこんなふうにいきなり名前で呼びかけてくることは、たとえメールであってもしない人間なのだ。メールを開き、画面をスクロールする妻の顔は目に見えて青ざめていく。

件名…まりあへ

このメールが見慣れない文体で記されているからといって

発信者がぼくであることを疑ったりしないで欲しい

ぼく、とはもちろん君の配偶者で同居人である×××のことだが

しかしぼくは君がよく知っているぼくとは異なっている
あえて言えばぼくはもうひとりのぼくなのだ

こう書けば精神保険衛生法指定医 (congratulations!)
の君なら

もうわかるだろう

そう、ぼくは×××の別人格

ふだん君が見慣れたあいつとは違うもうひとつ別のパ
ーソナリティーなのだ

ぼくがどうやってあいつから分離してきたか

君には興味あるところだろうが、長く書いているひま
はない

あいつが心身ともに疲れきって熟睡している今しか

ぼくにはこうやってメールを打つチャンスがないからだ
ここまで読んで妻は昨夜の自分の乱れぶりを思い出し、
かすかに頬を赤らめる。それからそつとあたりを見回し、
また携帯の画面に見入る。病院のある駅まではあと十五
分だ。

あいつの挙動がこのところ変なのに君は気づいている
だろう

実を言うとあいつはいささか精神に変調を来たし始め
ている

強大な宗教団体に迫害され命を狙われているという

妄想に取りつかれているんだ

去年郵送されてきた奇妙な写真をおぼえているだろうか？

あいつは教団が自分を脅迫するために送ってよこした
と知っているのだが

あれはあいつ自身が合成して送りつけたものだ

あるいはぼくの知らない第三の人格が脅迫を行っている
のかも知れないが

いずれにしてもこのままではあいつの神経は参ってしま
う

そうだったらこのぼくも共倒れなので

なんとか手を打てないかと思ってメールしたところな
んだ

単刀直入に言う

どうかぼくたちくぼくとあいつともしかしたら他にも
いるかも知れない

全部の人格の入れ物である身体を病院に入れて

薬物でも電撃でもなんでもいいから治療を施して欲しい

あいつは抵抗するかも知れないが

これはぼくからのお願いであり

ぼくたちみんなのために必要な措置なのだ

予言者たるあなたが精神病院に収容されたという知らせは瞬く間に信者たちに伝わる。彼らはある日時とURLを知らされ、その時間にそのサイトに接続することを要求される。殉教ということばがどこからともなく立ち上り、ネットに拡散していく。

入院後のあなたは治療の一環として毎日決まった時間にフォーマイカを装着され、ある治療環境にいざなわれる。エデンと呼ばれるそこは楽園の名とはうらはらな荒涼とした砂漠で、そこでああなたは何一つ動くもののないその風景を眺めているよう命じられる。そこには音が無い。ただほんの時おり、風が岩山の間を吹き抜け、猛禽が頭上をすぎるかすかな気配が感じられるだけだ。しかし、ささくれだった神経にはこんな景色の方がふさわしいのかも知れないとあなたは思う。だが、せめて明け方か黄昏の景色にしてもらえないものだろうか。ここでは太陽はいつも真上から照りつけてくる。もちろん空調の効いた病室は暑くはないのだが……

……突然フォーマイカの画面が切り替わったのであな

たは驚いてベッドから起き上がろうとし、その時はじめて自分がシートベルトのように強靱な抑制帯で固定されていることを見出す。制御装置の故障だろうか、あなたの視野にはぶれた画像がいくつも重なって投影され、しかもそれが不規則に動くのである。あなたはめまいをおぼえる。あなたはフォーマイカを外そうとするが手を動かすことができない。やがてあなたは気づく。これは十人かそこらの集団が病院の廊下を歩いて移動していく、その視野がいちどに投影されたものなのだ。そういえば今日は教授回診の予定だったかも知れない。これもひよつとすると治療プログラムの一部なのだろうか。抵抗をあきらめたあなたは回診の一行と同化して廊下を歩いていく。一行はあなたの病室の前で立ち止まり、あなたの部屋のドアノブを凝視する。

ひとりが鍵を開け、残りの九人はそれを見ている。やがて一行はあなたのベッドをぐるりと取り囲み、それぞれの位置からあなたを見下ろす。十の異なる角度から俯瞰されるあなたの身体はひどく痩せて頼りない。彼らは完全な円を描きつつ無言であなたのベッドを回りはじめる。回転する万華鏡。十等分されるパイ。これは何かの儀式なのだろうか？ あなたが平衡感覚を失いベッドから浮遊しはじめた頃、突然回転が止み、一行は目を上げ

て互いを見交わす。その時あなたはようやく気づく。こいつらが掛けているのはフォーマイカではない。なぜなら、フォーマイカ同士は素通しになるはずなのに、連中の目は黒い複眼に覆われたままで表情を読むことができないから。しかし、だとしたらどうしてあなた自身の表情が彼らに見えているのだろうか？ 見交わしている顔の中に担当医らしい長身のごま塩頭を見つけてあなたは声を掛ける。

（○○先生、○○先生でしょう？ これはいったいどういうことなんです？）

発したはずのあなたの声はあなたの耳に返ってこない。それは彼らの頭部を覆うよろいに跳ね返されて空中に消えてしまうようだ。もしかしたらこれこそが、この蟻の頭こそが彼らの本来の姿なのではないか？ ふだんの彼らは白衣をまとうように人間の仮面をつけていただけなんじゃないか？ 妄想じみた疑問が生睡のように湧いてくる。そして蟻の頭をかぶっていないのはおれだけなのだ。目無しの国では片目の男が王になると言う。蟻の国では蟻の頭をしていないものが王なのではないだろうか。

円の中から長いまつすくな刃物を持った男がふたり進

み出る。その刃物はメスやナイフというよりも槍の穂先に似ている。背格好も髪型も肌の色も変わらない双生児のようなふたりはあなたの両脇に左右対称に立ち、あなたに一礼するとその刃物を奇妙な格好で構えてあなたにじり寄る。

唐突にあなたは「審判」の一節くおそらくは主人公の最後の言葉くを思い出す。

(犬のように殺される！)

処刑人たちの視野はやがてひとつに交じり合い、その中央であなた自身の目が恐怖とあきらめをたたえながらまっすぐにこちらを注視している。あなたはあなた自身の瞳の中を覗き込む。両脇に激痛を感じながら、あなたは最後の瞬間まで目を開けていようと努める。

かすみかけた意識の底であなたは、ラテン語で記された神の名前を思い浮かべる。しかしあなたは彼の助けを求めようとはしない。

だがそれにも関わらず、いやむしろそれゆえにこそ、
私はあなたを迎えに行くだろう。

(了)

著者紹介

中条 卓 (Nakajo Taku)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/t-nakajo.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_1/ants/index.shtml

著作：タイムトンネル掘り (THE TIME TUNNEL DIGGER)

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/nakajo/time.html

在宅戦闘員

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/serials/nakajo/index.shtml>

鏡の国のファルス

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/anthology/mirror/index.shtml>

Sugar Babies

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_1/sugar/index.shtml

蟻の王

2002年4月8日 第1版第1刷発行

著者 中条 卓 (Taku Nakajo)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電脳工房りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。